

バリには松谷武判・後藤筆先生という具体出身のいい作家がいる。やはりさすが具体的に思うことがある。しかし、グループにいて、グループを理解することは割と困難なこともかもしれない。あたかも、自分自身が判らないようにしかし私は失礼をもかえりみず村上三郎先生にお尋ねしたことがある。「やはり具体は嶋本だ」と考えていますかと、ワザと反感を買う言葉を吐いたのだが村上三郎先生は「そうだ」と応じた。その意味は判らない。しかし、そうだという言葉に私は確信を持ったことは事実である。

それは私の誤解であろうと思うけど私の仮説によれば「具体」のそれは、東京・九州の作家に比較してトゲトゲしさが無い。比較的ゆっくりとした、それでいてきわめて具体的に極端な個性が出せるということの意味は大きい。それは関西に伝わる大阪商人か、なんだか知らないがズブトイ国際的規模の神経を持っているのである。その要素が一番大きいのが、ほかならぬ嶋本先生ということになる。素人の僕ふうと言うならば、嶋本先生は、そのアイデアと行動力によってふたたび「AU」というものを世界的なものに育てあげてしまった。そのことの意味はどれだけ強調しても、したりすぎることはない。そして、寛大にして若者をひきつけてゆく魅力に満ちた独創性は、やはり生来、嶋本先生が持っているもの、研讃されてきたものとみなした方がより自然である。早い話、AUにしても、その若さ、その独創性、もつと的確にいうならば前衛作家の集団ほど、やっかいなものはあるまい。具体にしてもAUにしても相当の程度の高さである。こんなグループを1年、3月と短い時間なら、カットのぼせていればいいのだから、なんとか解散にもちこめばそれで一大事業のケリは立派につく。それだけさえ大変なものであるがAUにして、すでに10年を早く越えている。

このズブといオルガナイザーは、いったいなんであるのだろうか。私には、いまだに、その奥にある嶋本先生の本体は理解していないが、そもそも、彼の偉大さは器としての人間、嶋本先生の大きさではないかと考える。なにはともあれ、一応実作者であり現実、絵を描いて売って生活している私にとって、作品がいい悪いは別として、作品がすべてであるということは十分承知している。にてもかかわらず、その絵を作り出す基（もと）、果実をみのらせる大地、即ち、絵を描く本人の器が問題になる時が、ただただあるといわねばならぬ。いや、別かも知れない、やはり作品かもしれないが、その作品にして、作者のありようが表出しておらねばならぬと私は実感する。きわめて判りやすくいえば、やはり絵は人間が描くものでその人間の大きさが要求されるのは、また当然ということである。その意味において作品は決して作家本人を裏切ることはないが、仲介者が常に誤るものであってみれば、その真中へおし座ることは、なかなかの困難がともなうことも事実である。それが事実だとすれば、それを10年間も持続させていくということの意義はどんな傑作を描くよりも、それ自体ですでに傑作であり、どの天才画家よりも、それを生産する生地である嶋本先生が天才なのだということである。